

平成28年度  
グローバルステージ in BRAZIL 報告書

---

海外県人会人材育成・活用推進事業実行委員会

|                              | Page |
|------------------------------|------|
| 事業概要 . . . . .               | 2    |
| 派遣団員名簿 . . . . .             | 3    |
| 派遣スケジュール . . . . .           | 4    |
| 報告書                          |      |
| 北島 敬章 (中村学園大学 1年) . . . . .  | 5    |
| 境 真希 (福岡女学院大学 1年) . . . . .  | 8    |
| 田中 美麗 (西日本短期大学 1年) . . . . . | 11   |
| 松尾 耀乃 (産業医科大学 1年) . . . . .  | 13   |
| 竹内 理沙 (西南学院大学 2年) . . . . .  | 16   |
| 金城 佑里恵 (九州国際大学 3年) . . . . . | 18   |
| 田尻 英彬 (福岡教育大学 3年) . . . . .  | 20   |
| 写真アルバム . . . . .             | 22   |

## 1 目的

福岡県出身者が移住した国（ブラジル）を訪問し、移住先で活躍している海外福岡県人などとの交流やフロンティアに挑んだ先人について学ぶ。また、現地の政治経済情勢やビジネス事情を理解することを通じて、国際感覚を身に付けると共に現地とのネットワークをつくる。

## 2 内容

- ・県人会員宅等でのホームステイ、大学等への訪問を通じた現地の人との交流
- ・フロンティアに挑んだ先人や移住の歴史についての学習
- ・企業、政府機関訪問等を通じた社会情勢把握
- ・上記を通じた現地とのネットワークの構築

## 3 派遣先 ブラジル連邦共和国サンパウロ市他

## 4 期間 平成29年3月4日（土）～14日（火） 7泊11日

## 5 派遣人員 7名

## 6 応募資格

次のすべてに該当する者

- ・派遣時において、福岡県内に住所を有し、原則として18歳以上30歳未満の者（高校在学中の者を除く）
- ・在籍する団体（勤務先・学校）の理解と承諾が得られる者（申込み時点で20歳未満の者は、保護者の同意も得られること）
- ・事務局が指定する事前研修、帰国後報告会にすべて参加できる者
- ・心身ともに健全で協調性に富み、団体生活に適応でき、派遣に十分耐え得ると認められる者

## 7 主催

海外県人会人材育成・活用推進事業実行委員会  
（福岡県、ジェトロ福岡、JICA九州、（公財）福岡県国際交流センター）

# 派遣団員名簿

平成28年度 グローバルステージ in BRAZIL

|      | 氏名     | 所属                              |
|------|--------|---------------------------------|
| 派遣団員 | 北島 敬章  | 中村学園大学<br>流通科学部 流通科学科 1年        |
|      | 境 真希   | 福岡女学院大学<br>国際キャリア学部 国際キャリア学科 1年 |
|      | 田中 美麗  | 西日本短期大学<br>健康スポーツコミュニケーション学科 1年 |
|      | 松尾 耀乃  | 産業医科大学<br>医学部 医学科 1年            |
|      | 竹内 理沙  | 西南学院大学<br>法学部 国際関係法学科 2年        |
|      | 金城 佑里恵 | 九州国際大学<br>国際関係学部 国際関係学科 3年      |
|      | 田尻 英彬  | 福岡教育大学<br>教育部 初等教育・理科選修 3年      |
| 団長   | 岡松 省三  | 公益財団法人福岡県国際交流センター<br>企画交流課長     |
| 事務局  | 新名 慶子  | 福岡県<br>企画・地域振興部 国際局 国際政策課 交流推進係 |

# 派遣スケジュール

平成28年度 グローバルステージ in BRAZIL

平成29年3月4日（土）～14日（火） 7泊11日

| 日程 |         | 時間            | 内容   | 宿泊              |
|----|---------|---------------|--|-----------------|
| 1  | 3/4（土）  | 朝             | 福岡空港出発   | 機内              |
| 2  | 3/5（日）  | 午前<br>午後<br>夜 | サンパウロ到着<br>移民資料館見学<br>県人会主催の歓迎会                            | ホテル             |
| 3  | 3/6（月）  | 午前<br>午後      | 日本移民開拓先没者慰霊碑へ献花<br>日系病院の視察<br>日系小学校の視察<br>JICA サンパウロ出張所を訪問 | ホテル             |
| 4  | 3/7（火）  | 午前<br>午後      | サンパウロ大学日本語コースを訪問<br>サンパウロ大学附属総合病院の視察                       | ホテル             |
| 5  | 3/8（水）  | 午前<br>午後      | ジェトロ・サンパウロ事務所の訪問<br>リオデジャネイロへ移動<br>市内視察                    | ホテル             |
| 6  | 3/9（木）  | 午前<br>午後      | リオデジャネイロ商工会議所会頭を訪問<br>サンパウロへ移動<br>福岡県人会 河野賢二氏と意見交換会        | ホテル             |
| 7  | 3/10（金） | 午前<br>午後      | 東山農場（日系コーヒー農園）<br>ホストファミリー出迎え                              | 県人会員宅<br>ホームステイ |
| 8  | 3/11（土） | 午前<br>午後      | 県人会青年部と交流会、意見交換会<br>ホストファミリーと交流                            | 県人会員宅<br>ホームステイ |
| 9  | 3/12（日） | 午前<br>午後<br>夜 | ホストファミリーと交流<br>県人会会員との交流会<br>サンパウロ出発                       | 機内              |
| 10 | 3/13（月） |               |  | 機内              |
| 11 | 3/14（火） | 夜             | 福岡空港到着   |                 |

## グローバルステージ IN ブラジル報告書

きたじま たかあき  
北島 敬章

(中村学園大学 流通科学部 流通科学科 1年)



今回のグローバルステージ IN ブラジルを通して、私が得た様々な経験で感じたことや思ったことについて述べます。

まず、ブラジルという国についてです。私はブラジルへ行く一、二週間前から緊張していてあまりよく眠れず、飛行機に乗るぎりぎりまで怖くて仕方ありませんでした。

というのもブラジルという国のイメージで一番思い浮かぶのは治安の悪さだったからです。ネットなどで調べても、強盗や殺人率は日本の何十倍や何百倍もあるということで、ますます怖くなりました。

しかし、ブラジルのグアルーリョス空港に到着してからは、すぐに県人会の皆さんが笑顔で出迎えてくれ安心しました。周りのブラジル人の方も雰囲気がよく、車でホテルに向かう途中にも、サッカーのスタジアムやグラウンドでサッカーをしている風景なども見受けられました。

ただ、一日目、二日目とサンパウロの町を車で移動していると、信号待ちで止まっている車に対して、必死にものを売っている子供たちや大人がたくさんいて、日本とはまるで違う、そう思いました。県人会の方に尋ねてみると「この人たちはこれで生計を立てている」と言われました。日本では、まずそのようなことをしている人はいません。そこで貧富の差というもの現実をみて、とても心が痛む思いをしました。今までは日本のレベルで考えていたことが、目の前でその差をみることで、この貧富の差が治安にも、かなり影響しているということが理解できました。

そんなブラジルでの生活だったのですが、毎日がとても刺激的なことばかりでした。町の道路などは日本に比べるとガタガタでとても歩きづらく、もちろん車に乗っていてもすごく揺れるので酔いそうになるほどでした。もちろん、きれいなところもありましたが、タバコやゴミがたくさん落ちている通りも多かったです。ブラジルの方の服装は、気温が高いのもあったかもしれませんが、日本と比べてラフな格好の方が多く、イメージ通り、男の方では、下はジーパンに上はサッカーチームのユニフォームという方もいました。洋服の生地なども、日本に比べれば質が劣るようなものを着ている人が多かったように思います。どれだけ日本に住んでいる私たちが良いものを身につけているのかを実感しました。食事については、日本よりも少し濃い目の味付けの料理が多かったのですが、とてもおいしくて、日本人の口にも普通に合う料理ばかりでした。特に南国なので、フル

ーツは格別なのを覚えています。

次に、移民の方々がされた苦勞について述べます。私は、このグローバルステージに参加しよう  
と決める前は、あまり移民についての知識はありませんでした。しかし、ブラジルで実際に移民資  
料館や東山農場など、現地に行ってみて、移民の方々がこんなにも過酷な状況の中、働き生活をし  
ていたなんて衝撃でした。移民の方々の生活は、朝4時の鐘が起床の合図。そして朝6時にもう一  
度鳴るのが仕事開始の合図で、終わりの合図にはラッパが鳴っていたそうです。奴隷そのものです。  
賃金はあつてないようなもので、必要最低限の日用品を買えるところはあつても、とても高い値段  
で、賃金では払えないような金額が設定されていたということです。そうすると借金をして買うし  
かありませんでした。夜逃げ防止のために1家族1パスポートとされていたにも関わらず、夜逃げ  
する人たちもいて、失敗した人たちは罰を受け、太ももの型をとらされて、それを家の瓦として使  
っていたそうです。私は、今までこんなにもつらい思いをして生活をされていたなんて知りません  
でした。日本でブラジルはお金のなる木があり、2、3年で大金持ちになると言われて、長い期間を  
かけて渡航してきたのに、ブラジルに着いても言葉も分からず、ただひたすらに奴隷として働く毎  
日。想像しただけでゾッとしました。

最後に、個人テーマとして設定したブラジルでのビジネスについてです。ブラジルはGDPが高く、  
ビジネス家にとっては見逃すことのできない国にも関わらず、これまでに日系企業が撤退している  
ことを疑問に思い、このテーマを選びました。

訪問させていただいたいくつかの日系企業では、まず、どの企業からもブラジルでのビジネスに  
は、多額な投資額が必要で、当たれば大きいですが、失敗すれば大きな損失を生むと言われました。簡  
単に言うと、ギャンブルで生計を立てていくのと同じくらい難しいという事でした。

では、ブラジルでビジネスを成功させるためにはどうすればよいのか、必要な条件と注意点を聞  
きました。条件としてはまずは良い土地、良い環境など自分の陣地をしっかりと良い条件で勝ち取  
ること。これはなぜかという、地域によっては税金をまけてくれることや、逆に騙されて、高額  
な金額を提示されることがあるからだそうです。投資額が大きい分、低コストで抑えることができ  
るところは、しっかりと抑えることが重要ということです。注意点では、差別ではないが、あまり  
ブラジルの人を信用しすぎてはいけないということでした。地域、文化、習慣などにも関わるかも  
しれないが、ブラジル人は約束を必ずしも守るとは限らない。つまり、日本人同士の約束ではな  
いということに、注意すべきだと言われました。このようなことから、日本とのビジネスの違いは  
現地に行ってみて初めて分かる事がたくさんあるのだと実感しました。

私は今回、様々な経験を得ることができました。その中でも移民の方々のことは本当に衝撃でし  
た。地球の反対側にある遠いブラジルという国で過酷な状況の中働き、暮らしていた。そんな歴史  
を現地で視察できたことは本当によかったです。福岡にいる色んな方々に移民の事をもっと深く知  
ってもらいたいと思いました。また、個人テーマについては、今回ブラジルでのビジネスについて  
たくさんのお話を学ぶことが出来ました。これらの経験はまだ漠然としています。将来はグローバ

ルな仕事をしたいという夢に向かってこれからの私生活、大学での残り 3 年間の学びに活かしていきたいと思います。

## ブラジル福岡県人会 (Associação Fukuoka do Brasil)

- 創立 1930年6月
- 会長 平山 秀夫 イナシオ (2016年2月就任)
- 会員数 951人 (750世帯)
- 所在地 ブラジル国サンパウロ州サンパウロ市
- 主な活動 (2016年) 定期総会、新年会、役員会、県人会担  
い手育成招へい事業への派遣、県費留学生壮行会、婦人部創立 40  
周年記念パーティ、親睦昼食会、九州ブロック運動会への参加、海  
外福岡県人会世界大会 (メキシコ) への参加、フェスティバル・ド・  
ジャポンへの参加、熊本大分地震への義援金募集など





## グローバルステージ in ブラジル研修参加報告書

さかい まき  
境 真希

(福岡女学院大学 国際キャリア学部 国際キャリア学科 1年)



私はこの研修に参加する前までは、ブラジルは遠い国、何となく聞いたことのある国、と考えていました。しかし訪れてみると、たくさんの人との交流があり、日本の真裏の国ではなく、とても身近に感じました。そこで私は、交流に焦点を当て報告します。

初めに、ブラジル福岡県人会との交流についてです。

サンパウロに着いて、空港内でバナーを持って県人会の方々から歓迎してくださいました。こんなにも手厚い歓迎は初めてで、皆さんと出会ってすぐから感動の嵐でした。県人会の方々から、おもてなしの数々があり、また、平山会長をはじめ、南名誉会長、県人会の皆さんのサポートのもと、毎日のスケジュールをスムーズに進めることができました。ブラジルという国で団員全員緊張していましたが、県人会の皆さんは、おおらかで緊張をときほぐしてくれました。私たちの行きたい場所すべてに来て下さり、大きなトラブルもありませんでした。また、食事の面もサポートして下さり、毎回現地のおいしい食事を振る舞っていただきました。ブラジル滞在中とても安心して過ごすことができました。

県人会の皆さんと意見交換会をし、そこでは、それぞれの国の印象や、ブラジルで何を学びに来たか、日本に来た際の不安の解消、日本で体験したこと、などについて意見を交わしました。ブラジル滞在の最終日には別れを惜しんで涙する場面もありました。それほど、私たちそれぞれの心に残る研修になりました。

交流会の最後に私たちから、炭坑節やダンス、派遣者の特技などの披露をしました。炭坑節やダンスなどは、県人会の皆さんも参加して下さってとてもなごやかな時間となりました。

次に、県人会の抱えている問題の解決法としての交流についてです。

県人会では、年々会員数が減っているのが現状です。

その理由として、1つ目に、仕事や勉強が忙しいことです。日系3世、4世は今の社会の担い手である若い世代なので県人会のようなボランティアをする時間が十分に取れないようです。

2つ目に、日系3世、4世になると、日本語を使う機会が少なく、日本語をしゃべる人が減ってい

るからです。

3つ目に、年配の日系1世、2世の方と日系3世、4世の方の意見のすれ違いがあることです。日本的考えの強い1世、2世の方とブラジル文化も取り入れたい世代とで意見が分かれてしまうこともあるようです。

4つ目に、世界の経済の中心であるアメリカなどに関心が向いていることです。

主にこれらの4つの理由で会員が減っているのではないかという話を伺いました。

そこで、私は県費留学、子弟招へい、グローバルステージが、なぜ必要とされるかを考えました。私は、若い世代の方々が自身の日系人としてのルーツを知ってもらいたいと思いました。1世の方々の大変なご努力とご苦勞があったおかげで、今の信頼される日本人、日系人ということが築き上げられたからです。

また、ブラジルと日本という2つも祖国があることを誇りに思ってもらいたいからです。

そして、何よりも、2つの祖国を持ち、2面、3面と国の文化を知り、両国の良い面、例えば、ブラジル人のおおらかさ、寛容さ、日本人の几帳面さ、規律を守るなどの良いところを持ち合わせている今の日系人の方々の文化が続いてほしいからです。

私がいろんな方と交流して感じた、もっとこういう交流があると日本に関心を持ってもらえるかなと思ったことがいくつかあります。

1つ目に、茶道、華道、書道、武道などに関心がある方が多かった印象がありました。だから、それらを気軽に学べるプログラムがあればもっと人気が出るのではないかと思います。

2つ目に、生活のサポートでもっと相談ができる環境が身近にあれば、安心して留学できるのではないのかと感じました。

3つ目に、先ほど述べた通りアメリカ、ヨーロッパに関心が向いているなら、日本語だけでなく英語も学べるプログラムがあるとより良いかと思いました。

4つ目に、県費留学や子弟招へいの方々がブラジル帰国後、日本にまだ来たことがない方に対して、ぜひ日本に行きたいと思ってもらえるよう日本の魅力を伝えてもらえればと思います。

このようなことがあれば、もっと日本に対して興味を持っていただけるのではないかと考えました。

また、河野 賢二さんとの交流についてです。河野さんは、現在もブラジルと日本とアメリカの間で精力的に活動なさっている方で、私たち団員にも様々な話をしてくれました。

特に、河野さんが、人と人とのつながりを大事に、そして、出会いを大切にしなさい、とおっしゃっていたのが印象的でした。実は河野さんは、私が高校1年生の時に学校に講演に来てくださり、お会いするのは二度目でした。まさか高校でお会いした方にこのような形で再会できるとは思いませんでしたし、お話ができたことに本当に驚きました。どんな形ででも人との縁を大切にしなければならぬ、と実感しました。

また、河野さんは、誰とでも積極的に話しなさい、とおっしゃっていました。私は、そういった

ことが苦手で、緊張してしまうのですが、これを機にもっと積極性を持ちたいと思いました。

最後に、ホームステイについてです。私がお世話になった南家の方々は、本当に優しい方々で、私たちがブラジル滞在している期間、とてもお世話になりました。いろいろなところに連れて行ってくださったり、食べ物を紹介してくださったり、多くの方に会う機会をつくって下さいました。感謝しきれないほどたくさんの思い出をくださいました。

今回の研修を経て、積極性の大切さや、人の温かみを感じ、今後、福岡にいらっしゃる海外の方との交流では、今回受けたようなおもてなしをしたいと思いました。また、教科書では、たった2,3行で終わっている歴史を詳しく知ることができました。私の大学で目標としているグローバル人材になるための第一歩になったと思います。

このような企画に参加できたことや、実体験ができた喜び、皆さんに支えられたこと、とても感謝しています。これらの経験は絶対に忘れることはありませんし、自分の将来の道標になると確信しています。



## 河野 賢二 氏

大牟田市生まれの日系1世

家族でブラジルに移住し農業、養鶏業、飼料会社、製薬会社での勤務を経験。その後、現地の三菱商事の立ち上げや、日本ODA案件のブラジル側の交渉人として活躍。現在は大手コンサルタントとしてブラジルと日本、アメリカの間で活発な活動を展開。

## グローバルステージ in Brazil 報告書

たなか みれい  
田中 美麗



(西日本短期大学 健康スポーツコミュニケーション学科 1年)

今回の派遣で私は本当にたくさんのことを学びました。多くの県人会の方に出会い、色々な職業の方に出会い、さまざまな体験をし、教訓を学びました。

私が訪れたかったオリンピック関連施設は、現在、使われておらず、訪れることはできませんでしたが、バレーボールのためにブラジルへ来ているという方に出会ったり、次にブラジルへ来た時にはクラブチームに連れて行くという方がいらっしゃったりしました。私がお世話になった今回のホストファミリーも「また泊まりに来ていい」と言ってくださいました。

このように、日本からは地球の真裏に位置するブラジルで、たくさん迎え入れてくださる知り合いができたことをとても嬉しく思い、また、おかげで、世界まで視野を広げることにつながりました。

私は今回の派遣者の中で、唯一外国への渡航経験がなく、すべてが初めてのことでした。空港でさえも初めてのことばかりで、どう動いていいのか、何を話せばいいのか、まず何を話しているのかもわからない状態でした。しかし、ブラジルへ行くために、日本国外のフライトを合計4回も経験したこと、帰りのフライトでは少し慣れて搭乗でき、外国への不安が本当に少なくなり、将来を考えるにあたり、外国へ出ることが夢ではなくなりました。

最初に、移民資料館を訪れました。日本の方々が、これほどの苦勞をされていたからこそ、今ブラジルで日系人の方々が厚く信頼されているのだということを感じました。働いても借金が課せられるなんて大変な苦勞をされてきたと思います。

河野賢二さんとの懇談では、貴重なお話を伺うことができました。まず27歳で倒産をされて、借金返済に追われたということに驚きを隠せませんでした。その次に驚いたのが、借金を返済するために会ったディーラーが、河野さんの車をはじめに言っていた価格よりも安く買い取ったのにもかかわらず、その後河野さんを大きく助けることになったということです。河野さんが借金を返した後に、そのディーラーがその後の河野さんの営業を手伝い、成功したからです。

河野さんがおっしゃるには、「今言えることは、出会った人との関係を保つことが最も大切だ」ということでした。

そして、今回の派遣で一番印象に残っているのは、県人会の方々との交流です。小さい子どもか

ら高齢の方々まで、様々な方と交流を行いました。私たちはお別れ会の際に、以前からブラジルで人気があると聞いていたマカレナというダンスや、どこの県人会でもみんなよく知っているという炭坑節を踊り、最後に PPAP を披露しました。県人会の方々もノリが良く、全て一緒に踊ってくださり、人気があるからなのだと思いますが、話を聞いてみると、初めて踊ったという方も多くて驚きました。

大学内にあった博物館を訪れた時、英語で話されることが多く、戸惑っていた私にさりげなく隣にいて、通訳をしてくださる方もいて、今思い出しても感動で体が震えます。他にも英語をもっと勉強しておいた方が良くと思う場面は幾度もあり、今回は、そのような方々のおかげで充実した日々を過ごすことができました。青年たちとの意見交換会ではなかなか初めは質問もなく、出だしは不調で、意外とみなさん恥ずかしがったりしているのかと思いましたが、言葉の違いのための遠慮という優しい心配りでした。

ホームステイでは、どこのご家庭も豪邸に住んでおられました。私がお世話になった家族は「狭くてごめんね」と謝っておられましたが、一部屋ごとにトイレとお風呂があり、広いバルコニーもついている豪邸でした。朝起きてからは「おはようございます」の挨拶とともに、果物の切り方も教えていただき、日本よりもすごく美味しい果物をたくさん食べさせていただきました。

サンパウロでは、市場では新鮮な果物をその場で試食させてもらいました。中には得体の知れないものや、口に合わないものもありましたが、なんでも食べさせてくれました。お買い物の際も日本人だからと安くしてくれる店員さんも多くいました。県会の方も値切りに奮闘して下さったり、色々な場面で大変お世話になりました。

スリらしい少年を見た派遣者もいましたが、実際にスリにあうことはありませんでした。県会の方々も言っていた通り、ブラジルでも日本でも、遭うときは遭う、遭わないときは遭わないように思いました。

乗っておられる車も豪華なものでした。天井が全てガラスのようなものでできているため、ブラジルの街を見ながらの走行でとても幸せでした。

本当にブラジルの方々は、みんな温かい人ばかりで、異国に降り立ってこれほどまでにストレスがたまらないものかと思うほどでした。大学のバレーボール選手としてブラジルに来ている日本の方も、近くに偶然住んでいたというだけで、ブラジル代表の選手と会う機会をつくってくれたということに驚いているとおっしゃっていました。

これだけ人の温かい国には、1週間では足りないと感じるばかりでした。日本へ帰りたくないと思うほどに、想像以上に良い国で、とても充実した10日間でした。

このようにブラジルに派遣していただき、たくさんの方々に出逢い、様々な体験をする機会を与えてくださって、本当に有難うございました。

## グローバルステージ in Brazil 報告書

まつお あきの  
松尾 耀乃

(産業医科大学 医学部 医学科 1年)



今回、私がグローバルステージに応募したのは、視野を広げたいという理由でした。ブラジルに行って日系人の方と実際に話し、彼らの文化に触れることで、彼らの考え方や価値観を理解したいと思いました。また、私は将来、疾病のみを診るのではなく、労働者の健康と密に関わり、家庭環境や社会背景を深く考察しながら、患者を人として総合的に診ることのできる医師になりたいと思っています。そのため、ブラジルの医療について知ることは勿論、ブラジル社会で生活する人々の教育、労働環境、経済についても見たり、聞いたり、体験したいと考え参加しました。

プログラムを通して、河野賢二さんとお話をする機会がありました。河野さんは、6歳の時に福岡県から家族でブラジルに移住され、現在は大手コンサルタントとしてブラジルと日本、またアメリカの三国間で活発に活動されています。言葉も分からない環境の中で、自分で生計を立て、現在の地位に至るまで多くの苦労があったと思いますが、「僕は前向きだから、キツイと思ったことは一度もない」と話されていました。また、「悲しいか辛いかは自分の心が決めるんだよ」と語りかけてくださったのが印象的で、私も夢に向かって頑張っていきたいと強く思いました。

河野さんは、スーパーでレジに並んでいる時、前の方や店員にも話しかけるそうです。そこで出会った人や、情報すべてがビジネスのヒントに繋がると話されていました。河野さんのように人との縁を大切にすることで、人生に色々な可能性が広がると思いました。

私は、ブラジル社会において、日系人はブラジル派もしくは日本派のどちらかになるものだと思っていました。しかし、河野さんは好奇心旺盛で常にアンテナを張りめぐらし、1つだけでなく2つ、3つの文化を吸収して、多角的に世界を見ていると感じました。河野さんは「(1+1) ÷ 2 の人間」ではなく、「1+1 の人間」でした。

また、河野さんは「ブラジルは一国だけ地球規模の国」とも話されました。私も実際にブラジルに行ってみて、ブラジル文化は他国の文化を融合したものだと思いました。街並みに関しては、ヨーロッパ風の地区もあれば、東洋風の地区もあり、道を歩いている人を見ると、肌が白い人、黒い人、黄色の人、巻き髪の人、ストレートヘアーの人など多種多様でした。また、食べ物もアジアやヨーロッパの料理をブラジルの地で独自にアレンジして、ブラジル料理になっているものがありました。このようなブラジル社会は、河野さんが言われる「地球規模の国」だと思いました。

次に、派遣にあたって私のテーマとしていた「医療」に関して、報告します。

私たちは、3月6日にサンタ・クルス病院を訪問させていただきました。日本人医師と日系人医師が中心となって、サンパウロ市に中央診療所を開設したのち、1936年に日本人のための病院が誕生しました。当時は南米一の病院と呼ばれ、最新技術をどこよりも早く取り入れ、医学界に大きく貢献をしました。太平洋戦争中、この病院は敵国の財産とみなされ、ブラジル政府に管理されましたが、90年代に日系人が経営復帰を果たし、現在は優良医療機関として、ブラジル国内で広く認知されています。

ほぼ全診療科を持っている総合病院で、約半数の職員が日本語を話すことができます。また、多くの職員が日本での研修を経験し、看護師が医療現場で学んだ5s（整理、整頓、清潔、清掃、しつけ）は、サンタ・クルス病院においてスローガンになっています。訪問時には、JICAから派遣され院内食として提供される日本食の指導を行っている日本人女性の方にもお会いしました。

このようにサンタ・クルス病院は歴史面、技術支援などの面で、ブラジルと日本、両方で築き上げてきた病院だと分かりました。最初の日本人移住者がブラジルに到達して110年を迎えようとしている今も、病院内で5sを徹底したり、日本食を提供したりと、日本との繋がりが非常に強いと感じました。

一方では、ブラジル独自の工夫も見られました。例えば、各病室の入り口に設置しているボードには、患者の名前、年齢、性別とともに、看護の上で留意することや手術の予定などが記され、医師や看護師が、情報共有できる工夫がされていました。カルテに関しては、背表紙に赤いテープを貼って山形模様を作ることで、配置順番が違っていると一目で分かるよう工夫し、取違いを防止していました。これらは日本の医療機関でも活用できると思いました。

その他に、産業医学の面について学んだことがありました。日本では、度々過労死問題、ブラック企業に関する問題が取り上げられます。日本とブラジルで働き方を比べると、日本人は仕事熱心で、仕事に対して非常にストイックですが、ブラジル人は時間に寛容で、のんびりと仕事をしているように見えました。生まれ育った環境が、働き方にも大きく影響するため、ブラジルでは見られない日本社会の問題を感じることができました。私は、将来、働く人の健康を守る産業医として、日本人の労働者ばかりでなく、これから益々増える外国人と接することになると思います。労働者一人ひとりの心と体の健康を守るため、それぞれの生まれ育った環境の違いや、その国の社会制度を十分に認識し、広い視野を持って勉強を進めていく必要を痛感しました。

ブラジルでは日系4世、5世の世代に入りつつあり、日本人の血を受け継ぎながら日本語を喋れない人や日本のことをあまり知らない人も増えています。グローバルステージのような交流事業があることで、日本に住む私たちと、ブラジルに住む日系人の方は、現在の互いの国を知ることができました。また、互いが出会えたことは、110年前に40日間かけて命からがら海を渡った祖先がつないだ縁だと感じ、私は日本、それから福岡をさらに愛しく思いました。この気持ちは、今回の旅で知り合ったブラジル福岡県人会の方々もきっと同じだと思います。彼らも今回の交流を通して、日系人としての誇りを感じ、「日本」という国が大きな存在になったようでした。ここにグローバル

ステージの意義があると思います。

グローバルステージは、今回の派遣だけで終了ではないと思います。私たち派遣者は、ブラジルで学んだ移住の歴史や文化を周囲の人に伝える使命があります。家族や友人に私の体験を伝えることで、もっと他国に興味を持ってくれる人が増えると思います。伝えることは、誰にでも簡単にできる国際交流だと思います。まずは、来年度来日される県費留学生に福岡を紹介し、今後は国内外を問わず福岡県人会の方々と交流を深めたいと思います。

最後になりましたが、派遣先でお世話になりましたブラジル福岡県人会のミナミ名誉会長、ヒラヤマ会長、フクナガさん、引率してくださった岡松さん、新名さん、本当に有難うございました。

## サンタ・クルス病院 Hospital Santa Cruz

「日本病院」とも呼ばれたサンタ・クルス病院の歴史は90年を数え、同病院の歴史は日本人移民の歴史とも言える。

1924年に結成された在ブラジル慈善協会「同仁会」が母体となり、移住者の衛生知識の普及を図る中で、ポルトガル語が堪能ではなかった移住者たちの日系病院設立への気運は次第に高まった。天皇陛下の御下賜（ごかし）金をきっかけに、日本政府の援助金、そして在伯日本人ほぼ全員が行った寄付金により、39年に日本人の日本人による日本人のための病院誕生として形となった。



しかし、太平洋戦争が始まると、同病院は敵性財産とみなされ、連邦政府の管理下に置かれ、戦後、連邦政府の管理下を離れた後も同病院の経営陣は、ブラジル人がほぼ独占し、日系社会へと返還されることはなかった。

その後、日系人関係者の長年の努力により、90年代にようやく日系人の経営復帰が果たされ、現在に至るまで最新医療技術のレベルを維持しつつ、サービスの向上に努め、サンパウロ州医師会から、受付対応の優良病院としての認定書の授与や、患者アンケートで満足度95%を得るなど、形となって表れている。

（出展：サンパウロ新聞）



## グローバルステージ in Brazil 報告書

たけうち りさ  
竹内 理沙

(西南学院大学 法学部 国際関係法学科 2年)



私は、このプログラムを通して、たくさんの方のことを学ぶことができた。私はもともと南米、ブラジルの文化などに興味があるため応募したが、このプログラムの主な目的である移住者の歴史・社会・文化については、以前から日系人の存在から知っていたものの、深くは知らなかった。今回の研修では、学ぶことが多くあり、たくさんの方のことを知る機会があった。

ブラジルへの移民は、1908年の笠戸丸に始まり、その歴史は約百年前にまで遡る。また第二次世界大戦では、ブラジルは日本とはいわゆる敵国であったため、当時の移住者は日本語を使った罪で、牢屋に入れられたということも起こったと聞いた。また戦争後も日本人移住者の間で、日本は戦争に勝ったという考えの勝ち組と、負けたと思う負け組に分かれてしまった。そして両方で仲たがいをし、犯罪事件にまで発展してしまったという。そのような暗い歴史も日系社会にはあった。

この研修では、たくさんの方の日系人の方とお会いすることができた。お会いした方々には一世二世の方は少なく、主に三世以降の方々がほとんどであった。三世以降になると、ほとんど、日本を訪れたことがない。現在の日系人の世代では日本語を話せない、また話す必要もなくなっているという現象が多くおきているようだ。

一方で、日本文化の面では、リオデジャネイロではあまり見られなかったが、サンパウロでは、リベルダーヂをはじめとして、日本料理や日本食品の店やお寺などが見うけられた。日本食品店では値段は少し高いものの、日本のお菓子屋や調味料、また日本のお米などが豊富に取り揃えられていた。このようなお店などを目にする、日系社会の確立が感じられた。またJICA等の訪問先では、日系人企業とのやり取りが非常に大事とおっしゃっており、日本とブラジルのつながりにおいても、日系社会の重要性を感じられた。

さて、私たちはこの研修で、主に教育機関や医療機関、日本企業や日系機関など、たくさんの方を訪れることができた。日系人関連の施設を訪れたときに感じられたのは、日本からの研修生などがあることもあってか、日本語を話せる人が多いことである。

一方で、日系人教育機関などの生徒は、日系人は多いものの半数は非日系人であり、日本語の

授業なども行われていたが、自主的に受けたい子供が受講するシステムであった。つまり、日系教育機関といえども、生徒全員が日本語を話せるわけではなく、日本語を全く知らない子供も中にはいるということである。そしてこの学校の先生が、日系の子供は、現在、日本語を話せる人が少なくなっており、また話す必要もなくなっているとおっしゃっていたのが非常に印象に残った。町中などで見かけた日系家族なども、コミュニケーションはポルトガル語であり、現在の日系人の若い世代は、完全にブラジル人というアイデンティティをもち生活していると思われた。

そして、滞在中の日常生活で感じたことは、ブラジルでは人と人の距離が非常に近い事である。まず、知人間での最初のあいさつはチークキスであり、別れ際にはハグであるため、物理的にも近いわけであるが、心理的にも人の温かさというものを日本人以上に感じられた。例えば、ブラジルで知らない人であっても、何かその場で起これば、それについて話しをして、感情を共有するというのが普通であるように感じた。レストランや公園でも、知らない人同士が話す光景を数回見かけた。日本人は、何か起こっても見なかったことにしたり、そのことについて感情を表に出したりすることは、あまりないように思うので、日本人とブラジル人の習慣や気質の違いを感じることができた。

また、類似したことになるが、ブラジルでは非常に家族間の絆が強いように思われた。当たり前のことかもしれないが、ブラジルでは家族そろって食事をとることが日常のことらしく、家族間での会話が、非常に盛んであるようだった。

そして、日本では近年あまりなくなっている近所づきあいというのもブラジルでは盛んである。これらのことを考えると、ブラジルでは、人と人のリアルなつながりを大事にしており、他とのコミュニケーションの盛んさを感じられた。

この研修では、ブラジルの表面的な文化だけではなく、日本人移住者の歴史や日系人の現在、またブラジル人の気質を知ることによって、ブラジルをより深く理解することができた。今後、まずこの経験や日系人の歴史、現状、文化などを周りに伝えていきたいと思う。また、現在大学で専攻している国際関係法やポルトガル語などの学習を進め、この研修を次につなげていきたいと思う。そして、これからもブラジルとのつながりを保ち、将来はブラジルと関係のある職に就くことで、ブラジルと日本の架け橋的存在になりたいと思う。

## 移民の歴史そして今

きんじょう ゆりえ  
金城 佑里恵

(九州国際大学 国際関係学部 国際関係学科 3年)



私は、移民の歴史と県人会の存在意義とは何かについて、この研修で得たことを述べる。

3月4日朝9時半、福岡空港に集合し出発式が行われ、これから本当にブラジルに行くのかと不思議な気持ちで福岡を出発した。まずは福岡から成田、成田からロサンゼルス、ロサンゼルスからサンパウロの計約23時間の長いフライトは、地球の裏側の遠さを実感した反面、思っていたよりも疲れを感じることは無かった。

サンパウロ到着後、すぐに県人会の方々が幕紙を持って歓迎してくれ、プログラムの始まりを感じた。到着後向かった先、ブラジル日本移民史料館では、さっきまで感じていなかった長時間フライトの疲れがやはり出てきて、時差ボケと闘いながらの見学となった。

ブラジル移民史料館は、日本移民70周年の記念日に開館し、ブラジル日本文化福祉協会によって維持され、運営委員会が管理している施設だ。ブラジルでの日本移民の始まりは、元々ヨーロッパからの移民を多く受け入れており、白人には劣る人種ということで、黄色人種は歓迎には値しなかったのだが、ヨーロッパ諸国の経済も回復し始め、ヨーロッパ移民が減ると、日本人移民に対する関心が高まってきた。そうして、1908年サントス港に最初の日本人移民を乗せた笠戸丸が到着した。お金を稼いでまた日本に帰るのだ、と夢を持ち日本の真反対に出てきたが、待ち受けていたのは、想像とは真反対の現実だった。朝4時には起床の鐘がなり、過酷な環境での労働が始まる。小屋に住みつく虫の糞によって引き起る心臓肥大病や、マラリアなどの感染症にも、多くの人が苦しんだそうだ。やっとのことで貰える年払いの給料は、貰えるどころか借金を伝えられる。なぜなら、一銭も持たずにブラジルへ来たため、生活費等を給料から引かれたからだ。稼いで日本に帰るどころか、ブラジルで借金を返すために働く日々が始まった。

そして、ブラジルと日本が対立した第二次世界大戦当時には、日本移民に制限が加えられ、日本の敗戦を信じなかった勝ち組と呼ばれる過激派グループによる事件の記録は、とても心の痛むもので信じがたい事実だった。日本移民の方々が頑張って稼いだお金で、都会生活を開始、商業・産業への参入が始まる。そこでは日本人の誠実さや勤勉さが各分野での成功を手にし、戦後60年代には日本企業の進出も始まり、ブラジル社会の幾多の分野で日系人が活躍した。

この移民史料館を案内してくれた TAKEDA さんの「言葉は非常に重い」という言葉が、印象に残っている。過酷な環境であったが、何より言葉が分からない、通じない事が一番の苦しみだったのではないかということだ。見知らぬ地、言葉が通じない事は、本当に本当につらかったらうなと TAKEDA さんの言葉でより、気づくことが出来た。

私が、このプログラムに参加した大きな理由は「県人会の存在意義とは」ということを知りたかったからだ。ブラジル滞在中、県人会の存在意義を感じる場面は多くあったが、県人会の満生ジュリオ・寿さんとの会話で、よりその存在意義を見つけることが出来た気がする。

満生さんの年齢は、平山会長や南名誉会長と変わらないくらいだったので、県人会歴が当然長いものだと思っていたが、会話をしているうちに、歴が短いということが分かった。話を聞くと県人会の方が、子弟招へい制度を満生さんに紹介し、満生さんの息子が参加したことから、満生さんが県人会へ参加するようになったそうだ。満生さんは、この制度にとっても感謝しており、家から県人会は非常に遠いが、積極的に現在も続けて県人会に参加している。

この流れで、県人会の存在意義って何だと思うか、と質問を投げかけてみると、「う～ん。難しいよね、気持ちじゃないかな。やっぱりルーツに日本があって、それを頭のどこかでは残しておきたいですし、残してもらいたいですよね。」との返事だった。

県人会の方々からは、人の温かさというものを改めて強く感じさせてもらった。人と人は必ず繋がりがあがる。その繋がりは、色々な形で存在するが、ルーツという繋がりは忘れてはいけない存在で、もっともっと強く繋がってほしいと、この1週間の研修で強く感じた。

今回のブラジル派遣では、旅行で行くのと違って、本当に沢山の貴重な経験をすることが出来た。日本移民に関しては、学校の歴史の授業で習うことはない。だが、辛い過去があって今がある日本移民の歴史について、同じ日本人また同じルーツを持つ日系人として知っておくべきことだと強く感じた。日本人は近いアジアの国に目を向けがちで、日系人も4世5世となると、ルーツに対する意識が薄れてくるのも、よく理解できる。だからこそ、このようなプログラムがあることで、お互いを知るきっかけをつかむことが出来る。私もきっと、このプログラムに参加しなければ、移民や日系人に対する理解は深まることがなかっただろう。このような機会を与えてくれた福岡県、ブラジルの福岡県人会の方々に感謝している。そして、今回の経験、学んだこと、感じたことを伝えていくことが、私の役割だと強く感じる。私がブラジルで温かく迎えられたように、今度新しく来る県費留学生を、次は私が温かく迎えたい。

## ブラジルで見つけた目標 ～ブラジルでの人との交流を通して～

たじり ひであき  
田尻 英彬



(福岡教育大学 教育部 初等教育・理科選修 3年)

今回「グローバルステージ in BRAZIL」に私が参加しようと思ったのは、日本から最も離れた国はどうなっているのだろう、という純粋な興味があったということと、企画の案内を見た時に、日本からブラジルへ移民を送っていたということを初めて知り、いま世界的に話題となっている移民の問題について、自分なりに考える材料を得たいという思いからです。

ブラジルに着くと、福岡県人会の方々、とても温かい歓迎をしてくださり、滞在中もずっと、素晴らしいおもてなしをしていただきました。福岡県人会の方々、約1万7千キロと、ブラジルから最も離れた位置にある、福岡のことを思ってくださっている、ということに私は感動しました。

ブラジルに行き私が感じたのは、ブラジルには、色々な顔立ちや肌の人がいるということでした。それはつまり、たくさんの人種が共生しているということです。日本は、アジア系の顔の人がほとんどであるということに比べ、ブラジルは、これまでにいろんな国から移民を受け入れていることなどから、街を歩くと、日本人のようなアジア系の顔の人もいれば、ヨーロッパ系の顔の人もいて、ブラジル人といえばこんな感じといった顔はないと思いました。これは、ブラジル人の寛容さにつながっていると私は考えています。通常であれば違う人種が同じ国に住むと、少数派を排斥しようとしたり、お互いに良い印象を持っていなかったりするものだと思いますが、ブラジルでは、全くそんなことはありませんでした。これは、人種に限ったことではなく、レズやゲイなどの性についても、いうことができます。ブラジルの街を歩くと、同性愛カップルが異性愛カップルと同じように堂々とキスをしています。人種や性について差別的な意識を持たず、いろんなルーツや価値観を持った人たちが共生できているということは、ブラジルの本当に素晴らしいところであると感じました。

寛容さといえば、福岡県人会の方々や、福岡県人会青年部の方々から聞いた話で、とてもびっくりしたのは、ブラジルの学校には、いじめがないということでした。悲しいことに日本の学校では、誰も、いじめに関する経験があったり、身近にいじめが起きたりしていますが、ブラジルでは、誰に聞いても、いじめはないと言われました。私はこれまで大学の授業や、様々な資料から、いじめは根絶しなければいけないが、いじめのない学校はなく、どこでも起こり得ることだ、という前提のもと、いじめについて考えており、これは世界共通で、どこの国の学校でもいじめはあるものだと考えていました。しかし、今回ブラジルに行き、ブラジルでは、いじめがないということを知

き、私のいじめについてのこれまでの考え方は、あくまで日本の中では正しいかもしれないけれど、決して世界共通の考え方ではない、ということが分かり、驚きでした。ブラジルの学校でいじめがないのは、様々な人に対して寛容さを持ち、共生している大人たちを、子供も見習っているからではないかと私は感じました。そして、こんな話を聞くと、私も寛容な人の多いブラジルに住みたい！と思いました。しかし、県人会の方から「あなたが周りに寛容さを持って接し続ければ、周りの人も寛容になっていくと思いますよ」と言われ、大切なのは周りの人ではなく、自分自身なのかもしれないと、ハッと気づかされました。私は、来年から小学校教諭になろうと考えています。私が学級を持った時には、子供たちが寛容な心を持ち、自分自身と違う考えや思いを持った人とも、共生して行くことのできる人間になるよう、まずは、私自身いろんなことを受け入れることのできる器を持った人間になりたいと考えるようになりました。

日系人の方がつくった学校であるアカマスクールを訪問させていただいた時、静岡県の小学校教育で、現在は、JICAの日系社会シニアボランティアとして、日本の文化体験の授業を行っている先生の授業を見学させていただきました。授業後に先生とお話しさせていただく時間があつたので、ブラジルの子供達と、日本の子供達を比べて、先生はどんな印象を受けられましたか、と尋ねると先生は「ブラジルの子供達は、日本の子供達に比べて自尊心が高いと思います」と言われました。現在、国際的な学力調査であるPISA調査の結果などから、日本の子供達は他国に比べ、自尊心が低いということがいわれています。そのため、どうやって子供達の自尊心を育てるかということが、日本の教育の課題となっていました。そこで、私は先生に、日本に戻られたら、ブラジルの子供達のように、日本の子供達の自尊心を高くするため、どんな教育を先生はされますかと尋ねると、先生は「厳しすぎるしつけが、子供達を萎縮させてしまい、自尊心の低下を招いていると感じたので、しつけは日本人の礼儀正しさや、誠実さの基礎をつくっているとは思いますが、しつけの厳しさについては、考える必要があるかと思うようになりました。」とおっしゃられていました。この先生のお話から私は、日本が抱える教育の問題の解決策や、解決のためのアイデアは、日本を出てみて、初めて見えてくるものがあるのではないかと感じました。

今回、ブラジルで活躍されている日系人の方々や、訪問させていただいた企業で活躍されている日本人の方など、みなさん日本やブラジルのために情熱を持って働かれており、来年から社会人となる私も、今回お会いさせていただいた方々のように、情熱を持って働きたいと考えるようになりました。また私も小学校教諭になってから、JICAなどの事業に参加し、国際的な教員として働き、いろんな国で得た知識や経験を、私の身近な地域や、福岡、日本に還元できる人材になろうと思います。

# 写真アルバム

平成28年度 グローバルステージ in BRAZIL

平成29年3月5日（日）



ブラジル県人会による空港出迎え



ブラジル日本移民史料館見学

平成29年3月6日（月）



イビラプエラ公園日本館訪問  
（慰霊碑献花）



日系人経営・サンタクルス病院視察



日系経営・赤間学園小学校視察



JICA サンパウロ出張所訪問

平成29年3月7日（火）



サンパウロ総合大学訪問



サンパウロ総合大学附属病院視察

平成29年3月8日（水）



ジェトロ・サンパウロ事務所訪問



コルコバードのキリスト像

平成29年3月9日（木）



リオデジャネイロ日本商工会議所会頭訪問  
(三井物産株式会社支社)



河野賢二氏訪問  
(ケンブリッジ・アメリカ事務所)



平成29年3月10日(金)



東山農場視察



東山農場視察

平成29年3月11日～12日(土・日)



ブラジル福岡県人会との交流会



ブラジル福岡県人会との交流会



ブラジル福岡県人会との交流会



ブラジル福岡県人会のみなさんと